ミニ・シンポジウム　「藤崎八旛宮例大祭とまちづくり」　講演録

日時：平成二六年十一月八日　十三時三〇～一六時三〇
場所：熊本市立熊本博物館　特別展示室

プログラム

【基調講演】
熊本大学名誉教授　安田宗生先生
「近現代における藤崎八旛宮例大祭の変遷」

【報告1】
藤崎八旛宮氏子総代　毛利秀士先生
「新町の鉾とまちづくり」

【報告2】
河尻神宮宮司　宮川經宣先生
「河尻神宮例大祭の現状と、まちの力」

【パネルディスカッション】
「祭りを残していくのに重要なものとは」
安田宗生先生
毛利秀士先生
宮川經宣先生

【総評】
藤崎八旛宮権宮司　岩下通弘先生

※　シンポジウム企画立案及び司会
熊本博物館学芸員　福西大輔

1、開催趣旨

福西　大輔

お時間となりました。今日は、ご来館いただきありがとうございます。本日の司会をさせていただく、熊本博物館の学芸員・福西大輔と申します。よろしくお願いします。まず、本日のミニ・シンポジウム「藤崎八旛宮例大祭とまちづくり」開催の趣旨をお話します。

熊本市は新幹線が通り、政令指定都市になり、市域を広げ、まちの形が大きく変わってきています。それに合わせるように各地の祭りが変わりつつあります。伝統的な祭りを残していくにはどのようにすれば良いのか、考える時になってきました。熊本を代表する祭りである藤崎八旛宮の例大祭も例外ではありません。そこで、熊本博物館では市民の皆様と一緒に藤崎八旛宮や河尻神宮の例大祭を通して、伝統的な祭りを残していく意義と方法について考えていきたいと思い、本シンポジウムを開催しました。

本日は、このテーマに沿って、三名の方にご講演とご報告をいただいた上で、パネルディスカッションを行ないたいと思っております。その場で、ご意見・ご感想を会場からお伺いしたいと思っております。

まず、お一人目は熊本大学名誉教授・安田先生です。本日の基調講演をお願いいたしております。ご存知のように安田先生は、熊本の民俗学研究の第一人者です。本日は「近現代における藤崎八旛宮例大祭の変遷」というテーマでお話をいただきます。当時の新聞記事をもとに近現代の変遷を調べられております。このお話を通して、皆さんに藤崎八旛宮例大祭に関して、共通認識をもっていただこうと思っております。

続きまして報告をお二人にお願いします。お一人目は藤崎八旛宮氏子総代の毛利先生です。毛利先生は新町を中心に熊本のまちづくりを行っている中心人物のお一人です。同時に藤崎八旛宮の氏子さんの代表でもあり、長年絶えていた新町の鉾を復活させ、藤崎八旛宮の例大祭を盛り上げる努力をされております。そうしたことを「新町の鉾とまちづくり」というタイトルで報告いただきます。

そして、お二人目の報告者は河尻神宮宮司の宮川先生です。河尻神宮は藤崎八旛宮と並ぶ熊本市を代表するお宮で、下がり馬に代表される例大祭も良く知られています。その祭りの中で鉾が出ていることを知っている方は意外に少ないと思います。かつて多くの鉾が各町内会からお祭りには出ておりました。ところが、年々姿を消していき、今では本田町だけが奉納しているような状態になっています。町内で持っていた鉾も行き場を失い、姿を消しそうになっております。そうしたものを残そうと、宮川先生は氏子さんたちと相談の上、境内に新たに蔵を作られ、鉾などを残していく努力をされております。そこで、本日は「河尻神宮例大祭の現状と、まちの力」というテーマでお話をいただきます。

今回御講演を賜わる三名には、神社と町を結びつけるものの象徴である「鉾の奉納」ということにポイントの一つを置いていた

だき、お話をしていただくようにお願いしております。パネルディスカッションをしていく上での共通項として用意し、議論を進めやすいようにしております。

今回は会場の都合もあり、基調講演は一時間、報告は三十分程度と比較的短いものになることをご了承下さい。また、基調講演と報告の間には十分程度の休みを用意しておりますので、その間にお手洗いなどはおすまし下さい。その後に、三名の方を中心にパネルディスカッションを行ない、「祭りとまちづくりについて議論をしていただきたい」と思っております。そこで、「祭りを残していくのに重要なものとは何か」を考えていければ良いなと思っております。

最後に藤崎宮権宮司・岩下先生の方から今日のシンポジウムの総評をいただきたいと思っております。長い時間になりますが、お付き合いをお願いいたします。

2、基調講演

「近現代における藤崎八旛宮例大祭の変遷」

熊本大学名誉教授　安田宗生先生

実は私が最初に藤崎宮のお祭りを見たのは、昭和五十年に熊本に参りまして、その年に右も左もわからない時に藤崎宮の祭りを見ました。この時の印象は何て変な祭りなのだなというものでした。何故そう思ったのかは追々お話申し上げたいと思います。

まず、藤崎宮の祭りの問題は、大祭を構成しているメンバーが非常に特異だということ、それから大祭の運営資金の調達が特殊だということです。そして三番目に実は藤崎宮の祭りが、熊本の北岡神社をはじめ、八代の妙見宮などの祭りの基本になって出来上がっているのではないかと思います。

それは実は数年前から八代妙見宮の調査をやりまして国指定の文化財になりました。その時の調査をふまえまして、藤崎宮がわからないと他の神社の祭りはわからないというのがありまして、その辺をお話できればと思っております。

それから藤崎宮は時代によって祭りの性格が変わっております。逆に言えば、いろんな社会情勢に振り回されてきた神社ともいえると思います。

現在の藤崎台球場にありました神社が西南戦争で焼けます。渡鹿に仮殿を建て、ご神体を遷します。そして、現在の藤崎宮に仮殿を造りまして、明治一六年に本殿・拝殿の着工に致しまして、翌年九月に竣工です。そして、現代になっていきます。

安田先生

実は場所が代わったというのが非常に大きな問題を引き起こしました。

藤崎宮の祭日は旧暦八月一一日から一五日でしたが、維新後、数度変更されています。まず、明治一一年に新暦に切り替わっている。これはですね、県が太陽暦採用をした時に、新暦でやるように祭りの指導があり、そこから新暦になりました。ところが、明治一七年になると、これを再び旧暦に戻します。ちょっと、行き過ぎたなという反動が起こります。明治二〇年になると、新暦四月一一日から一五日に変更になります。これは後で申し上げますが、コレラが大流行して、しばしば祭日が延長されることがあり、コレラの流行する時期を避けようと、春と夏を入れ替えようとします。これは藤崎宮だけでなく、北岡神社も出水神社も全部春に切り替える。ところが、その翌年に再び旧暦の八月に戻すのです。で、これは何故なのかわかりませんが、明治二一年の四月の祭りは、直前まで四月に祭りを行なう予定でいたのです。出水神社や北岡神社は春に行ないます。四月で何年か行ないます。藤崎宮だけはいち早くもとに戻る。明治四二年に新暦九月一一日から一五日に、これは明治四三年に神社祭祀を新暦に切り替えろという国の指令があり、その指令に基づいて、他の神社は変えるのですが、藤崎宮は四二年から変えているのです。藤崎宮は早いのが特徴であります。

祭日変更の理由ですが、延期されたのはほとんどがコレラで、明治一二年・明治一三年がそれにあたります。明治一六年は祭礼経費の負担をめぐって氏子間で紛争がおきます。現在の御旅所に関わる経費はすべて新町が負担することになっていました。新町は藤崎宮の大祭にお金をかけている。

ところが、藤崎宮は井川淵に移りましたので、新町は藤崎台にあった時にはちゃんとやっていたのですが、これから十年近く、新町は藤崎宮を元の位置に戻そうとする運動をします。結局、戻らないのですが、従来どおりの経費のあり方でよいのかということでガタガタします。

明治一六年は皇族の方に不幸がありましたので、後半が延びている。明治一八年・一九年ともにコレラによって延びています。明治三五年もそうでございますが、一二月にやっています。大正元年は大喪第一期中でズレ、大正五年は一〇月一一日から一四日で、コレラ病流行のため、大祭が延期されたのは、この年が最後です。奉幣式のみが九月一五日に執行されている。他の行事を延ばしております。大正五年以降、祭日の変更がありません。

行事日程ですが、若干動いているようです。大祭が五日なのは変わらない。初日から五日目までは間で変化があります。一日祭、二日祭、三日祭、四日祭、五日祭と行なわれるのですが、初日の獅子の飾り卸しや三日目の神馬の飾り卸しなどは変わらないのですが、四日目の奉幣式は、明治四十年から開始される行事でありまして、明治四十年以前には奉幣式は行なわれておりません。で、五日目は神幸式ということになります。神幸祭。正式には「オミユキ」と読むのだと思いますが、神様がお出ましになるというこ

とになります。この神幸式は一時期変則的な日程で行なわれていました。明治十一年から一五年までは四日目に本宮を出て、御旅所で一泊して戻ってくるという形式になります。そして明治一六年以降、旧例通り、五日目の最終日に一日で終えるということになります。

次に行列の構成を見てみます。明治二三年には前駆・榊・阿須波能神が入ります。これは明治政府からの指令で、藤崎宮もその方針に従い入れております。問題は飾り馬で、神官さんがいて、その後に飾り馬が入ります。それは何故かというと飾り馬そのものが、神官さんの乗り物だと考えれば、当然神官さんに付随していくべきものというところになると思います。そして、一番後ろに獅子がきている。これはおかしいなと思います。普通、お祭りの場合、獅子は先頭に立つもので、藤崎宮では獅子が一番後ろなのか、疑問の一つになります。八代妙見でも獅子は先頭に立っています。これがまず、わからなかった。

昭和九年に子供騎馬武者が出て、子どもさんが入ってくるようになります。これが、戦後になって、なくなりまして、確か昭和四十何年に厚賀さんが奉納することになります。ここで一回復活するのですが、なかなかうまくいかない。

昭和九年の段階でみると、随兵頭・随兵・長柄・随兵頭副・長柄頭・御幸奉行・獅子・町鉾・町旗・飾り馬となっており、飾り馬が最後にきております。飾り馬自体は本来ならば、神官さんの乗り物だから、神官さんに付随すべきものなのに、一気に後ろに下がってくるというのが特徴になっています。これについては後でお話したいと思っております。

それで第一日祭ですが、明治一九年には神楽が舞われるぐらいで、何もないのが、明治二九年には和歌式、獅子飾り卸しがなされ、大神楽が行なわれています。明治四三年には和歌式・獅子飾り卸し・挿花が行なわれております。明治一九年に獅子飾り卸しがなされてなかったのは実は西南戦争で獅子頭も牡丹車もみんな焼けてしまっている。そのため、出られなかったのです。生け花が行われておりまして、この生け花というのは、熊本のほとんどの流派が、早くから入ってやっております。しかも戦前の生け花の奉納は熊本市内の、名家のお嬢様、奥様がやっている。ステータスなのです。藤崎宮のステータスなのです。出水神社や北岡社でも生け花の奉納をやっているのですが、藤崎宮は特別なのです。つまり、上層階級のお嬢様や奥様がやるということなのです。だから、新聞には生け花の奉納者の名前が全部載ります。なかなか暑い時にやりますので、藤崎宮の待遇の悪さにやらないというストライキもありました。藤崎宮もあわてて控え所を設けて、待遇を改めるから続けてくれということもあったりしました。

二日目の祭りですが、明治一九年には和歌式がなされ、明治四三年から弓術と相撲がなされるようになります。弓術は市内の各流派の範士が奉納しております。相撲は吉田司家が奉納ということになります。実はですね、今は藤崎宮のそばに吉田司家がありますが、吉田司家はもともと白川公園のところにあったのです。

（註：藤崎宮のそばにあった家は平成二〇年に売却され、マンションになって碑のみが残されている）吉田司家はそこに県庁が建つということで、立ち退いてくれということになり、吉田司家が今のところに移ります。ところが、吉田司家では藤崎宮大祭の三日後に県内の出世相撲を行なっていた。その出世相撲というのを藤崎宮が取り込んだものです。吉田善門は第二十三世で、藤崎宮の氏子総代になられて、彼が氏子総代をやっている時に藤崎宮の例大祭の行事に取り込まれたのです。

三日目は基本的に現在と同じで、神馬・飾り馬の飾り卸しです。一番目は鳥居元、二番目水道町。以下抽選ということになります。かつては神幸式当日より賑わったといわれるぐらいでした。

四日目ですが、決まった行事がなかったようで、明治一九年には競馬をやっております。競馬は何回か開催されるのですが、明治二九年には子供踊りというのが出ておりまして、明治四十年に奉幣式が開始されます。これは先ほど申しましたように明治三九年内務省勅令第九六号で県知事が幣帛供進使として藤崎宮に参向しなさいということなのです。代理可能であり、明治期は県の課長級、大正期は部長級が代理で参向、昭和に入ると知事参向が多くなる。だんだんと偉い人が出てくるようになります。

当時の新聞記事によれば、神幸式が午前二時に御発輦式がなされ、五時御発輦して、新町御旅所について帰ることになっています。（註：当時の記録によれば、神幸式は明治一六～二五年までは午前二時出発、同七時御旅所着になっている。午前二時出発では行列が整わず、しばしば遅れることから出発を同五時に変更された。その後も遅れ、昭和一〇、一一年は五時三〇分出発となり、六時出発となるのは昭和一〇年からである。岩下先生によれば、今は午前に二時に朝御饌祭がなされ、六時に御発輦となっている）

現在、藤崎宮から御旅所にいて本宮に帰ってくるという形になっていますが、これも変だなと思っています。普通のお祭りというのは御旅所に行くまではすんなり行くのですが、御旅所から戻るときには、いろいろ作法があって、時間をかけて戻ってくるのが一般的です。阿蘇神社の御田祭もそうですね。御旅所から帰るときには何とかという歌を唄うなどがありますが、藤崎宮はすんなり戻る。どうしてだろう、おかしいのではないかと思って調べてみると、御旅所までの道筋が、神社の場所が変わったことによって変化したものだと気づきました。

昔は御旅所に行って、御旅所から戻る時に、当時の新聞記事などによれば、一の宮の神輿は山鹿市石村、二の宮飽田郡池田村、三の宮は段山に向かい、それから本宮へ帰ってきました。それが本来ですよねと納得しました。

それで現在のコースですが、基本的には南廻り、大鳥居を出て、坪井広町・米屋町・上通・下通・新鍛冶屋町・紺屋今町・唐人町・明八橋・新町三・二・一丁目を経て御旅所に行くのが道筋です。

大正七年には藤崎宮で工事が行われていたため、南廻りに行く道がうまくいかなかった。それで臨時として浄行寺へ出て行くルートが作られます。大鳥居・浄行寺町・立町・横町・布屋町を

経て米屋町に入るものです。ところが、それは一年のはずだったのが、浄行寺町・立町側が恒例化してくれということで、毎年ルートをめぐって紛糾することになりました。そのため、一年交代で廻りましょうということになりました。北廻りと南廻りを交代で行なうようになり、現在もそのようになっていると思います。

次に神幸三役ですが、いろいろと説がありますが、三宮千春宮司は、御幸奉行が一〇〇〇石、長柄頭が五〇〇石、随兵頭が三〇〇石以上だといわれております。九州日日新聞は御幸奉行が三〇〇石、長柄頭が五三〇〇石、随兵頭が一〇〇石以上だと書いております。後藤是山先生は軽輩が勤めるものだといわれております。

次に随兵ですが、加藤清正がはじまりだとされていますが、明治二三年には、麻生田・楡木・兎谷・花立・黒石・保田窪の各村が奉仕しております。実はこれらの村は開拓村で、保田窪は細川時代の開拓村で、そういった人たちが随兵に参加していたということになっております。この随兵のことを「つうむし」といい、この言葉ですがマスコミなどは今でも使うことがありますが、これは戦前、蔑視の意味が使われており、あまり良いものではありませんでした。「つうむし、つうむし」といわれるので、保田窪が参加しないと言い出すこともあったようです。

随兵行列

神馬ですが、三基の神輿にそれぞれ一神馬がついており、明治ぐらいからですが、消防組が奉納している。奉納者は固定しておらず、明治二四年には一の宮が新町・二の宮が六間町・三の宮が安巳橋通で、明治三〇年には一の宮が新町・二の宮が水道町・三の宮が安巳橋通で、大正四年には一の宮が水道町・二の宮が新町・三の宮は新屋敷町が奉納しており、こういう風にぐるぐると神馬を奉納する町内が変わっていきました。ただし、全体的にいえるのは、新町はどっかの馬を奉納することが多い。新町が外れることは少ないのです。ただ大正一〇年から昭和五年までは、池田町の緒方平太が神馬三頭を奉納しております。この期間は各町内に回ることはなかった。

獅子舞ですが、明治のはじめには神幸行列に獅子が付いていない。獅子は新町一町目が奉納しています。行列の最後尾に位置している。通常、獅子は行列の先頭に立つ。牡丹車という山車を伴うのが新町の獅子舞の特徴になります。県下に見られる獅子舞のなかで「一に藤崎、二に妙見、三に西岡」といわれ、藤崎宮の獅子舞が良いといわれております。ただ、現行の舞方は明治初期に作り上げられたものだといわれています。

宮永さんのいうところによれば、明治の初めに来た歌舞伎役者から習った。舞台でやる舞方だといわれております。現在舞われているものが、どの程度の古さがあるのかは、ちょっと問題となっ

ています。

明治一〇年に獅子頭・牡丹車とも焼失しており、明治二三年に獅子頭・牡丹車は新しく作られ奉納されるのですが、明治三二年には、獅子頭を保管していた家が火災に遭い獅子頭が焼けてしまい、藤崎宮の祭りには参加しなくなります。明治三九年に獅子頭を新調して奉納します。今度は大正六年に牡丹車が破損しまして、大正十年まで獅子頭のみ奉納されております。大正十一年から昭和四年までは奉納ができておりません。それで昭和五年に新町一丁目だけでは持たないので、一・二・三丁目連合で獅子を復活させて奉納を再開し、現在に至っております。

飾り馬なのですが、本来、藩の重臣が一二頭を奉納していたのですが、明治維新後は氏子町内が奉納しておりました。奉納頭数は年によって異なります。景気の良い年は増加し、不景気な年は一二頭を下回りました。奉納頭数変動の理由はやはり多額の費用を要するので、毎年奉納できる町内は少数であったと考えられます。

そこで、ちょっと飾り馬奉納頭数を抜書きしてみると、明治十一年は十七頭で、明治十八年は三頭、明治二四年には四十二頭が奉納されております。もっとも戦前で奉納頭数が最も多かったのが、大正十一年の九十四頭になります。その前の年が八十頭になります。ところが、大正七年は九頭しか出ていません。飾り馬は非常に変動が激しいといえます。戦後を見てみますと、昭和二十二年をみてみますと、四〇頭出ていますが、三〇年代後半に入りますと、九頭・八頭・五頭・六頭・五頭・六頭と一桁台に大きく減ってきます。そして、昭和五〇年代からは、やや上向き加減になりまして、だんだんと上がっていくことになります。

戦後の飾り馬の頭数増加は実は企業と高校ＯＢによるものです。昭和五〇年に濟々黌と熊本高校が初参加します。この年は熊本工業大学、今の崇城大学も参加しております。九州産交・熊本信用金庫・熊本相互銀行・岩田屋伊勢丹・木原産業・建吉組・永田住建・熊本総合卸売市場・熊本青年会議所・熊本青年経営者友好会といった企業も参加しております。こうしたことから高校や企業の参加が増えていったところが特徴になります。つまり、この五〇年くらいから藤崎宮の祭りが大きく変わります。つまり、それまでは氏子中心、氏子町内を中心とする飾り馬から熊本市内を中心とする企業や高校が一気に増えてきます。

いかにも熊本らしいのですが、熊本高校と濟々黌、熊本商業と熊本工業といったように参加が増えていきます。昭和五五年には高校数は十三団体になっています。五年後です。その中には九州女学院、今のルーテルも参加しております。つまり、女性だけの飾り馬が出てきます。口取りは男の人がしたようですが・・・。その翌年には熊本市立商業高等学校が初参加をいたします。

神社の祭りに何故女性が参加しているのか、それも私を驚かせました。熊本は早くから男女同権なのかもしれません。変だなと思いながら女性の馬追いについて調べてみますと、実は明治一三年に女性がすでに参加しています。女性が男装して馬追いに参加しています。これがいつまで続いたかは不明ですが、一時期消え

るのだと思います。そして、大正一四年の記事に「近頃女性が馬追いに参加」とあります。これについては警察が馬追いに女性が参加することの禁止を通知します。昭和五年に女性参加厳禁の指示が出て、この年以降、女性が参加できなくなりました。戦後になりますと、昭和二七年に二本木組のお姐さんたちが二〇〇名参加しまして、それ以降、女性が参加しております。もともと女性が戦前から参加しておりましたから、戦後に女性が参加しても抵抗なく受け入れられたのかなと思っております。

馬追いの問題点ですが、出場に多額の経費を要するために寄付の強要が起きてしまうことにありました。一般市民の反発を買い、警察に苦情が殺到することがありました。それで警察が寄付を強制的に取ることを取り締まることになり、今度は馬追いの人たちが反発することがありました。その繰り返しでした。つまり、勢子側が反発したら取締りを緩める。緩めたら寄付強要になる。そうしたら、市民から苦情が殺到する。一番酷い時には飾り馬の関係者が警察署に押しかけて、署長と直談判になる騒動までいきました。

もう一つは飾り馬に対する虐待行為、馬を殴ったり、蹴ったり、酒を飲ませたりすることでした。戦前からビールを飲ませることがあり、市民の反発を買い、そうすべきじゃないという話になったのですが、止まなかった。そして、もう一つはお酒を飲んで、他組の飾り馬を叩き、他組の進路妨害をして喧嘩になる。喧嘩がない年はないというぐらい、喧嘩があるのですが、戦前の最大の喧嘩は明治二九年、新町組と島崎組が衝突し、双方二〇〇名以上による大乱闘になり、警察官が全然制止できない状態になりました。その時は送検者が一三名にもなりました。だいたい送検されるのはいつもならば、一人か二人ぐらいなのですが、この時はすごかったようです。

次は町鉾・町旗なのですが、明治二三年以降、毎年奉納されているのですが、明治二三・二四年は「数本」ですが、明治二八年には「町旗数十旒」で、明治二九年には、市議会が「市内百三十ヶ町より各々幡幟一旒宛」奉納を決議します。そのため、この年は百本以上旗が出ています。ところが、長続きせず、明治三六年には「町鉾町旗数十旒」になります。また、増やすなどをやってきています。そうしますと、藤崎宮の祭りなのに市議会が盛んにしなければいけないという形で、市が非常に積極的に藤崎宮の祭りにテコ入れしている。だから、藤崎宮側も市議会や県の意向を無視できない。それによって変わっていくのがわかります。

で、鉾は、これから河尻神宮宮司の宮川さんのお話などもあると思いますが、藤崎宮も鉾がありました。明治一〇年の戦争で焼けたと思います。だから、なかなか、それを作って奉納するというのが難しい状況だったと思います。で、新町の仲通り繁栄会で昭和四十何年かに復活させますが、小さい。谷隆さんにお話を聞いた時に、市電が走っていたので電線に引っかかるため、引っかからない程度に低くしたといっている。だから、本来は高かったと思います。そういう鉾を大正時代に三基程新調しています。だ

から、八代妙見宮の菊童子を中心とする鉾と同じような鉾が藤崎宮の祭りでも出ていたはずだと思っております。それがなくなったということが一つであります。

町旗ですが、大正五年に「旗持はドノ組のも多少の奇抜を示して居た」とあるように、頭髪を剃りあげたり、奇抜な衣装で行列に加わっていたようです。近世における大名行列と同じで、大名行列も非常に演劇的で芸能的な側面を持っていた。だから、熊本県下でも奴踊りなどのいろいろな踊りが祭りでは見られます。奴踊りは江戸にいって覚えてきたもので、江戸の大名行列に参加する奴が行なうもので、それをまねてきたものになります。だから、祭りというのは非常に厳粛的に厳しくやっていく部分と芸能的な側面があった。戦前にはそれが見られた。「あそこの衣装のつくりが方うまいね」「あれは良いね」などがあったのですが、今はなくなってきている。それが戦前と戦後の違いかなと思っております。

御旅所での能楽はほとんど変わりません。本座の喜多流・友枝家と、新座の金春流・桜間家が奉納をしております。明治から行なわれております。「翁」を含めて五番の演目が行なわれております。「翁」の演目が非常に問題で、これをどちらが舞うかでいろいろあったという話を能楽関係者からはよく聞きます。「翁」は原則、友枝・桜間両家が一年交替で行ないます。いかにも武家の作法という感じがします。熊本には明治四一年、新市街に能楽堂ができます。熊本の人は非常に能楽が好きでした。今、また能楽堂を作ろうという運動が起きております。

御旅所

次は馬追いの掛け声ですが、明治一三年から二三年までの新聞記事を見ると「エーコロ」で、「エーコロ、エーコロ」の声が響いたといっています。明治二四年からは「エーコロボシタ」といわれはじめ、昭和の初め頃までは「エーコロ」あるいは「エーコロボシタ」の表現が断続的に見られます。この「ボシタ」という言葉には幾つかの説があるのですが、一つは性交を意味するボボシタから来た、もう一つは「滅ぼした」の語が詰まったのではないかというものがあります。その他にも説があります。

藤崎宮の大祭を「ボシタ祭り」としたのは、新聞記事で見ますと、昭和二六年の見出しからです。戦前はほとんど使用されておりません。終戦直後から昭和二五年まで、ボシタという言葉は「敵を滅ぼした」という意味だから使わないようにということで、自粛されていきます。翌年、二六年から解禁されましたが、昭和四六年からボシタ祭りという表記を用いないことになり、この年から「藤崎祭り」に呼称を統一されました。

「ボシタ」の意味ですが、熊本のお年寄りのお話ですが、藤崎宮の祭りは、昔は神仏混合でしたので、神主やお坊さんが馬に乗っ

ていました。ところが、新町の御旅所へ通じる道は短いですが、急な坂なので、馬の口取りをしている人が、馬をわざと走らせて、お坊さんたちを馬から落としたというのです。落としたお坊さんたちは「エーコロボシタ（えー転ぼした）・エーコロボシタ（えー転ぼした）」というふうに囃し立てられたとおっしゃっています。それで、後にお坊さんたちは歩いていくようになったといわれています。そうしますと、馬から落ちたので「エー転ぼした」「転ばした」という解釈もあるのかもしれません。

熊本の名物である第六師団と藤崎宮の大祭ですが、藤崎宮の祭神が軍神であることから軍隊の崇敬を集めました。そのため、大祭の整備に在郷軍人が強く関与していました。その際たるものが随兵頭で、大正十一年から在郷軍人聯合分会長が就くようになりました。一番初めについたのが、井上第五郎です。陸軍大佐です。この方は最終的には広島師団の連隊長を務める人物で、宇土の花園村の出身です。それ以降、在郷軍人会聯合分会長が勤めることになったようです。その前までは氏子の人たちが入っておりました。先ほどお話しました吉田善門、吉田司家の方で、彼は十一年続けて、随兵頭をやっておりました。六丈一寸で二十貫で、非常に大きな方でした。その後を継いだのが宮脇彈次で、剣術師範で非常に随兵頭に相応しい人でした。そして昭和に入ってきますと、御幸奉行と長柄頭も基本的に代わってきます。当時の新聞記事によれば、随兵頭は在郷軍人、御幸奉行は市長、長柄頭は市議会議長が付くようになります。そうなりますと、神幸三役は市議会と在郷軍人会が行なうようになり、随兵・長柄とも熊本市在郷軍人会（氏子地区）の会員が務めています。（註：昭和五年から一九年になると、今度は青年訓練所生徒、中学校生徒、商業学校、農業学校生徒、そして師範学校生徒が務めるようになる。戦争激化で在郷軍人が参加できなくなったからだと思われる）

終戦直後になりますと、中学校や熊本農業高校などの人も入ってきますが、ところが、これにかなり反発する動きがあったようです。在郷軍人会が随兵などをやっている時に酷い時には投石や罵声を浴びせられていた。つまり、氏子さんがやるべき祭りを市議会や在郷軍人会が大きく関与して祭りを変えてきた。そのため、藤崎宮の祭りの中核が何処にあるのか見えてこない状況がうまれてきたと思います。

そして、藤崎宮の祭りを支えてきたのは、新町なのです。新町が一番頑張っているのです。昔も今もそうですが・・・。新町があっての藤崎宮の祭りだったのです。市議会が関与し、県が関与し、在郷軍人会が関与しながら藤崎宮の祭りを作り変えてきたのです。祭りそのものは変わらないのですが、中身は少しずつ変わっていった。その頃から、熊本市を代表する祭りになっていった。藤崎宮の氏子さんだけの祭りではなく、熊本を代表する祭りになっていった。

だから、戦後になっても熊本市長が随兵頭をずっと務めることになりました。星子市長なども行なっており、市の祭りになっていました。本来、（神社の意向とは別に、担い手である氏子さんた

ちにとって）氏子のお祭りであったものが、市の祭りになった時に、あるいは県の祭りになった時に祭りの性格を変えるのはどういうことなのか。高校ＯＢや企業が参加して飾り馬などはやっておりますが、彼らは藤崎宮のことを知らないかもしれない。飾り馬だけ出しておけば良いというふうになっているかもしれません。そういう状況になっています。これをどう見るか。

つまり、これが、これから向かっていく新しい祭りの形としてみるのか、どうなのか、この辺りを考える必要がある。それを意識しなければいけなくなったのは高校ＯＢが参加したあたりからです。昭和五三年からの「前夜祭」や「はっぴコンクール」などが行なわれております。「前夜祭」は藤崎宮のお祭りとほとんど関係がありません。これを良しとするのか。

藤崎宮のお祭りは神様のお祭りであり、神様があってこその話です。神様の祭りであるという色を失わないで、皆に参加していただけるのかという難しい局面に立っていると思います。これは真剣に考えなければいけない時になっています。

こうした流れがあると思います。大祭を盛んにするために市や市議会が関与しなければならないという話は明治一九年にはいわれております。この頃には藤崎宮のお祭りに参加する人がほとんどいなかったそうです。そのため、藤崎宮の祭りが無くなるといわれ、市議会で議論されておりました。そして、それならば、熊本県域全体から寄付金を集めなければ、藤崎宮の祭りは持たないという話になりました。そういった危機感の中、市議会が関与していきました。お金を出す限り、いろんな意見をいうことになります。そして、先にお話したように昭和四年から御幸奉行を市長、長柄頭を市議会議長、随兵頭を在郷軍人会聯合分会長といった形で氏子以外からの三役で固定される。戦後になると、随兵頭は市長が務めますが、御幸奉行と長柄頭は氏子総代が行なうようになります。

つまり、藤崎宮の祭りは、県や市、在郷軍人などが強く関係することで振り回されてきた側面があります。そして、先程申しました「ボシタ」が「敵を滅ぼした」という説は、実は幕末の記録にも出てきます。江戸時代にはそうした説はあったようです。ところが、戦前、「ボシタ」が「敵を滅ぼした」であると盛んにいわれる時期があります。一つは日清戦争の時、もう一つは日露戦争の時、そして第二次大戦の時、つまり戦争になると非常に強調してくる。これも先程いいましたが井上第五郎は「敵を滅ぼした」の意味だから、「いい加減な言い方でいうのではなく、大きな声でやることに意味がある」と盛んに強調しています。「敵を滅ぼした」という説は江戸時代からあったかもしれませんが、皆が信じるようになっていたわけではありません。ただ戦争になると、それが強調されていきます。しかも、藤崎宮の神様は軍神だと・・・。朝随兵と夕随兵とは出陣する際の構え、帰ってきた時の構えだという言い方が強調されている。で、それが戦後になって滅ぼしたという説が一般的になっていったのだと考えられます。

こうしたことをふまえると、藤崎宮ほど、さまざまな人々の思惑に振りまわれたところもないと思っております。これでお話を終わりにさせていただきたいと思っております。

3、報告

①「新町の鉾とまちづくり」

藤崎八旛宮氏子総代　毛利秀士先生

新町で藤崎八旛宮の総代を務めております毛利といいます。よろしくお願いします。私は三十分時間をいただきまして、新町の町鉾とまちづくりについて、話をさせていただきたいと思います。先程、安田先生のお話がありまして、もう少しじっくりとお話を聞きたいなと思いました。新町の町鉾にも触れていただき、藤崎宮のお祭りの全体の流れについても良くわかりました。

私どもは何とか藤崎宮の祭りを文化財の指定にしたいと氏子の人々とも話しています。昔あった町鉾を復活させて、そしてお祭りの中でも大変重要な役割を果たした町鉾を地域の人々に、熊本市内の人々にもわかってもらいたいと思って、町鉾の復活に取り組んでおります。

まず、最初の写真は、宇土櫓から新町方向を見たものです。ちょうど藤崎台の野球場が見えています。熊本の城下町は一六懸り八六町で、新町は五懸り一六町ですが、今ではすべてを新町といっており、残念に思っています。

次に明治初期の絵図を見ますと、堀に囲まれたところの左側が旧井芹川です。旧井芹川の右側に高麗門の堀があります。現在、その堀に沿って新幹線が走っております。そこから右側に曲がっているのが坪井川で、坪井川は改修工事をして、坪井川の内側、高麗門の堀の右側、旧新町になります。今年、熊本城の構えの城下町として新町も認められております。

昭和四〇年に町名変更をしております。熊本市の布告により、旧一六の町名が新町に変更してしまいました。理由としては行政からは町名が道筋なのでわかりにくい、町名が多すぎるといわれました。先輩の人たちから聞きますと、町側はお上には逆らえない、言うことを聞かないといけない雰囲気だったといわれております。ところが、隣の古町は清正公さんのつくった城下町の名前を何故変えるのだと反発して、旧町名が残っています。「特別史跡熊本城跡保存管理区域」に本丸・二の丸・三の丸・ＮＨＫのある千葉城・第一高校のある古城地域に、高麗門の遺跡や新三丁目御門の写真の発見などもありまして、討

毛利先生

論され研究され、今年の九月三日に特別史跡熊本城跡保存活用委員会によって、新町地域が追加されました。

絵図にもありますが、野球場のある藤崎台にあった藤崎宮の氏子地区として一六町内はずっと、そういう気持ちでおり、町鉾の奉納を復活させたいと、まず勉強会等をはじめました。鉾とは古代より神秘的・宗教的な呪術の象徴的武具で、長く神前や宮門を飾る威儀の具として、また、災厄をもたらす疫神を鎮めるための依り代で、行列に先立って大路の清祓の役割りを果たしてきました。そうしたことを理解した上で、新町の鉾はどんなものが良いのか、どのような町鉾にしようか考えてきました。

先ほどの安田先生のお話にもありましたように時代によって、奉納される町鉾の数が変わってきました。百を超えることもあったといわれております。江戸時代、今から約四〇〇年前には寛永一〇年（一六三三）の記録には「笠鉾五十本　当町より出ス」とあります。江戸時代からかなりの数が奉納されていました。奉納するにあたり、何で途絶えてしまったかを先輩たちに聞きました。やはり後継者不足と、維持する資金が不足したことがあげられました。新町には飾り馬、新町獅子、町鉾があってこそ、お祭りの奉納が出来ていると考えまして、途絶えた町鉾を復活させました。特に鳥屋町は、写真等を見ますと、子供たちを中心に五〇から一〇〇人が供奉しています。こうしたことから昔は鉾一本に一人ではなく、何人も付いています。それが何十本も出ていました。時代によって違いますが、鉾に対する思い入れが深かったと思います。

永青文庫の町鉾の絵図を見ると大きいのがわかります。描かれている人間と較べても大きな武者頭があり、私たちが復活させた武者頭はそこまで大きくないので、何とか大きな武者頭の復活させることも考えております。いずれにしても江戸時代の町鉾はきらびやかで、いろんな人たちが奉納しています。後ろの方に騎馬に乗っている長柄の頭が見えます。その前に鉾が奉納していたことが絵図からわかります。時代によって違うと思いますが・・・。

伝統ある町鉾を一六年ぶりに復活させたのですが、地域のコミュニティーの柱になるということから、校区の自治協議会を中心に各種団体と図って、一新校区自治協議会町鉾保存会を形成しました。理事二二名いますが、各種団体の方や地域の有力者に入ってもらって、運営資金を集め、役員さんや引き手を誰が勤めるのか、保管場所は何処にするのか、台車をどのような形にするのか、四年前から活動を始めました。

最初に復活できたのは鳥屋町と塩屋町の二基の町鉾です。鳥屋町は藤崎宮に鉾を預けていました。塩屋町は洗馬橋のすぐ近くにある呉服店の倉庫の二階にありました。この二基の町鉾を何とか復活させるため、修理をし、台車も造り、それに合わせて武者頭も二基新しく造りました。

二四年には新桶屋町と新魚屋町が一緒に町鉾一基制作しました。今年は女性が八名参加し、観客の注目を集め、熊日新聞などが取り上げてくれました。これから写真を見ながら説明したいと思います。組立てをしているところですが、昔の大きさと同じかわかりま

せんが、この塩屋町鳥屋町は、かなり大きなものです。宮本建設さんの車庫をお借りして行なっているところです。

これは藤崎八旛宮に初めて奉納した時のもので、御祓いを受けました。真ん中に鳥屋町、左が塩屋町、右が新桶屋町・新魚屋町が並んで御祓いを今年は受けました。

神幸式の時には、町鉾保存会という幟旛を先頭に町に行きました。女性は顔を隠した衣装にしましたが、いろいろな意見がありましたので、これから考えていきたいなと思っております。鉾が大きくって一人では持てないので台車に乗せております。

鉾と藤崎宮

ここまでが鉾の話で、これからは城下のまちづくりに視点を変えてお話していきたいと思っております。新町の獅子舞は藤崎八旛宮で舞います。天拝の舞と、牡丹の舞というものがあります。天拝の舞は藤崎宮の正面に向って舞います。

まちづくりは熊本の起点、里程元標がある現在の清爽園を中心として、行なってきました。そこから近い新町を主としたとしたまちづくりの団体、一新まちづくりの会が活動の核になっています。そして、先程お話しました一新自治協議会が協力しています。

一新まちづくりの会は「新町に住む誇りと喜びを胸に仕掛けていくまちづくり」と市の広報に書きましたような会です。この会は、平成に入る少し前にＰＴＡの活動があり、その役員の皆さんが、地域をもっと住みやすい町にしようとしたのが始まりです。平成元年に発足して、今年で二六年目になります。まちづくりの基本的な理念としては四つあります。一つは、新町は江戸時代からの歴史があるから「歴史を観光に活かす」があります。二つ目には、「総合福祉村構想の実現」といって福祉の環境を整えて、安心し安全で暮らせるような、お年よりも子供も暮らせるような、まちにしていこうというものです。障害のある人もここならば安心して暮らせる、そうした福祉の町にしていこうということです。三つ目は、環境を整備することです。藤崎台の楠や清爽園の整備などがあります。四つ目としては「基盤整備」です。電線を地中下にするとか、新幹線の高架下の利活用などの町の基盤を整備することを考えております。

そして、旧町名を復活させる試みを具体的に進めていこうと思っております。その中に町鉾の復活を置き、城下町らしさを持っている町にしなければならないと考えております。歴史と旧町名の関わりをしっかり勉強していくことを共通理解にしようと思っております。地域の中をまちづくりの人が誰でも案内できるように、そういう城下町の案内人を養成しております。そして、新町にあった門や水の遺産を復元していきたいと思っています。そうしたものを熊本市に申請して登録を取ることも行なっています。城下町の町並みづくりに助成金を出す制度も始まりました。自治協議会の中の規約に

城下町再生があり、藤崎宮例大祭の町鉾奉納の復活が実現しました。

その他にもサイン整備事業を行なっており、案内看板やシャッターに江戸時代のイメージ、城下町らしい絵を描いており、校区のカルタづくりなども行なっています。そして町内歩きがあり、これからしなければならないのは城下町の町並み協定の準備で、行政との連携も進めております。

最近では映画にもなりました「るろうに剣心」の緋村剣心、抜刀斎のモチーフの一人である河上彦斎が、一新小学校の近くの新馬借町で生まれましたので、これを取り込んで町おこしに利用していこうと思っております。藤崎宮の御旅所の能舞台を利用して舞台上演などもおこなっております。

ここから写真で町並みを見てみたいと思います。まず、里程元標がある現在の清爽園です。江戸時代は、ここから一里・二里・三里と数えていました。次はお城の登城口で博物館の近くになります。次に旧町名の看板と石柱で、城下町らしさを取り戻すために行なっています。これは高麗門・上職人町になります。こうしたものが二三ケ所あります。

そして、これが先ほどの安田先生の話にありました、藤崎宮の神幸式でお坊さんが馬に乗っている様子をシャッターに描いたものです。県立大学の学生さんたちが協力して描いてくれました。一の勢屯の様子が宮本建設にも描かれています。夜や休みの時にシャッターを下りていると、こうした絵を見ることが出来ます。「攻めも守りも要の地」と書いており、大変重要な場所でありましたよということがわかるようになっています。村上からし蓮根さんのシャッターには藤崎宮が富くじをやっていた様子が描かれています。

高麗門跡から遺跡が発掘調査され、熊本県から報告書が出ております。現在の明八橋にあった新三丁目御門の写真が見つかり、熊本洋学校長マンスフェルトが撮られたもので、長崎大学付属図書館が発表しました。

そして藤崎台の千年楠群です。大きいものだと幹周りが二十mもあります。次に一新小学校に古い写真が残っており、発表して良いかわかりませんが、新町 御客屋（藩迎賓館）の写真ではないかというものも見つかり、これから検証していきたいと思っております。

ちょうど三十分になりましたので、私の報告はこれで終わりにしたいと思っています。

シャッターの絵

②「河尻神宮例大祭の現状と、まちの力」

河尻神宮宮司　宮川經宣先生

みなさん、こんにちは。私は川尻にあります、河尻神宮の宮司・宮

川と申します。私どもの取り組みについての話をということでお呼びいただきました。皆さんの中には河尻神宮をご存じない方もおられると思いますので、神社のお話からさせていただきます。

河尻神宮は八幡様が主神でございます。藤崎八旛宮さんと一緒なのですが、名称は河尻神宮としており、「神宮」という言葉を使わせていただいております。一般の神社とちょっと格式が違うというか、天照大神からの直系の、天皇家に関わる神様をお祭りしているお社ということで名称を許された神社の一つです。一般には官国幣社のみ使用が許されるのですけれど、明治の時に特別由緒ということで、熊本県の民社（諸社）の中で許されたのが五社ほどあり、その中の一つです。

流鏑馬とか、下がり馬とか元気の良い神事がある神社として知られております。ここのところ、テレビ等で取り上げていただいておりますので、ご覧になっていただいている方も多いと思います。下がり馬というのは馬に下がって、一五〇mほど下がって走るもので、馬と一心同体で駆ける行事になります。非常に人気がございます。本当に怪我と紙一重で、間違えますと大怪我をするものです。他県からもお出でになる方とか多くなりました。流鏑馬等もございますので、藤崎宮さんと同じく五日間祭礼をご奉仕します。

宮川先生

北岡神社、藤崎宮、河尻神宮は一ヶ月違いで行ないますが、先程、安田先生の方から祭礼日についてお話があったと思いますが、先代から聞いておりますには、熊本地方、近郊のお祭りを「祇園、放生会、飽田の祭り」といって三大祭りとしていたそうです。祇園さんが北岡さんで、放生会は藤崎宮さん、そして河尻神宮が飽田郡にありますので、今は熊本市になっておりますが、三大祭りに明治の頃まで数えられておりました。

北岡さんのお祭りも、今、復活していろいろなさっておりますが、藤崎宮さんのお祭りは盛大で、熊本県下全域からいらっしゃっておりますが、私どものお祭りは三大祭りに数えられていますが、地域が田舎なので、皆様方の目になかなか届きにくいというか、見ていただけないところがありましたが、氏子のまとまりがよく、行事がずっと続いております。

今日は傘鉾のことをお話しなければいけないですが、私どものお祭りは氏子さんたちの地区が、川尻町は商家の町ということで、「小字」の町々からいろんな出し物を毎年奉納していただいております。他の田舎の方の地区は一四地区に分かれていて輪番で流鏑馬、下がり馬等の行事を奉納する、十四年に一回受持の「年行事」という役回りを務めることになっています。そういう形で綿々と明治の頃から引き継がれてきております。その中で、傘鉾、神輿は現在では本田町のみが祭礼の時にお宮に上がってくることになっております。戦前までは七基ほどの傘鉾があったそうです。戦後の煽りでなかな

か管理ができないということで、雨にあたり、打ち壊れてなくなり、現在は三基だけ残されております。先程、毛利さんの方からお話がありましたが、藤崎宮さんの鉾とは形が違って、河尻神宮の傘鉾は、神殿様式になっており、三メートルほどですか、二段の上の方が上下に上がる、からくりのついた傘鉾でございます。昔は四、五人で担いで神社の方に上げていたそうです。これがずらっと並んで参道にくるところを想像しますと、雄大だったのだな、盛大だったなと思っております。是非とも、この形を復元できたらと考えています。

二、三年前までは、本田町のお宮に上がっている一基と、横町の一基があったのですが、横町のものは痛みが激しくお宮に上げることができませんでした。何とか組み立てを行ない、修繕してお宮まであげたいと考えていました。しかし、それを管理して守っていくのも大変だと考えていたら、新田町にもまだ傘鉾があると聞きました。すでに無くなっていると思っていましたので驚きました。

新田町の傘鉾

新田町の傘鉾を管理していた方は建物も傷んで手狭になり、雨漏りもして、これ以上管理ができないというお話でした。そのままにしておくと組み立ても出来なくなるというお話になり、どうしようかという状況になっていました。一度、新田町の方が博物館にご相談なさりましたが、大きなものですから、場所がないというお話になり、私どものところに連絡がきました。本当にありがたいことだなと思い、氏子総代会で相談しました。お宮の方で、あるいは地元の方で飾ることができるような手を考えようと氏子さんたちに話を持ちかけました。氏子総代さんたちは非常にこうしたことに関心を持っていただいており、何とかしましょうという話になりました。はじめは新田町の鉾だけでも預かって、倉庫をつくろうという話になりました。

ただ、しまって置くだけでは意味がないので、地域の方々、地元の方々に昔から伝承してきて、これを後世に伝えていくのだということを意識してもらうために何とか神社としてできることはないだろうかと考えました。そこで、常設展示、展示といっても倉庫みたいな建物の外から傘鉾を見えるようなものを作ったら、どうだろうかと考えました。神社の屋根にマッチングした建物を造りました。

傘鉾をそのまま収納できる建物をということで、とんとん拍子で進みました。ガラス戸が三mあり、幅三・五mから四mほどありまして、ここに三基の傘鉾を組み立てたまま展示して、見ていただけるようにしました。先祖が、こういう立派なものを祭礼に奉納していたことを地域の方々にしてもらうことで、誇りに思ってもらうことからはじめたら良いのではないかと思っております。現在一基だけ新田町の鉾だけが入っております。そのうち残りの二つ、本田町も横町も持ってこられることになると思っております。神社の財産だといえば、そうですが、川尻の財産、皆さんの財産であることを意

識してもらい、これからも守っていくという認識を持ってもらうために努力していくつもりでおります。

この鉾は約二〇〇年前のもので文化・文政期に新調されたものですが、その前から形はあったと思います。そのころが川尻の町が一番栄えた時期なのだと思います。大変立派なものです。また、同じ倉庫には今、雨乞い太鼓が収められています。これも雨乞い太鼓などはもうないだろうと思っていましたらありました。古い文化財的なものを掘り起こして、もし場所がないならば、お宮の方で預かりますということで、皆さんにお話をしていたら、うちにこういうのがあるので保管できないかということになり、白藤町の雨乞い太鼓を預かっております。

今、どうしても若い人は下がり馬や流鏑馬といった馬を扱う方に気持ちが走って、傘鉾などの昔からの出し物に対して意識が低下しているような気がします。今一度、再認識していただいて、大神輿で二千万円するといいますから、鉾もそれくらいはすると思って、大切にしていただければ良いと思います。将来はこのまま保存して、同じような複製を神事に使うようにできればなと思っています。夢のまた夢かもしれませんが・・・。

河尻神宮の倉庫

その他に川尻には獅子舞もあります。新町に劣らないもので、三〇〇年近くの歴史があります。獅子舞には獅子頭と、牡丹の花飾り、掛け軸等の古いものがあります。そういった今使っていない獅子頭等を預かって、祭礼の宝物として倉庫の方に展示をしたいと思っております。今度、こうした展示倉庫をつくりましたことで、非常に神社の厚みが感じられるようになったのかなと思っております。どうしても馬を扱う行事は無形なもので、形が残りません。こうした有形で形の残るものが河尻神宮にもあるということを知っていただければと考えております。

河尻神宮のお祭りは八代神社（妙見宮）と藤崎宮さんの間、挟まれていたところに位置するので、どちらの影響も受けていると考えております。先程、安田先生のお話にもありましたようにお祭りというのは、そこが単独で出来上がったものではなく、交流の中で創作されて作り上げられて変化していくものだろうなと思っております。ただ、その中でも形あるものはそれなりに立証されるものなので、無形のものは想像でしか語れないですが、傘鉾などを守っていきたいなと考えているところであります。

神社の祭礼を継承して存続させるのは難しいことがたくさん出てきます。一番の問題点は交通面の問題が大きくなってきています。何をするのにでも道路使用許可が必要となり、安全面の徹底を第一にクリヤーしないと許可が下りないような形になっております。その辺を今年も苦慮しました。これからも超えていかなければいけな

い問題になると思っていますが、その次にあがるのは、高齢化・少子化・若者の流出です。本当に川尻もそういう面では人手不足になっています。傘鉾を出している本田町も人数がそろえば持って行きますというお話しで、今年はやってきていただきましたが、毎年人数が揃わなくなってきているというお話をお伺いしております。こればっかりは、その地区での奉納になるので、人が増えるなり、応援してもらわないと難しくなっているようです。

話は少し変わりますが、獅子舞・風流舞・傘鉾・子供御輿とありますが、傘鉾を奉納できなくなったところが、子供御輿を代替として奉納されています。風流舞式という行事があるのですが、古い歴史のある行事でして、謡いに合わせて稚児が舞を舞う行事で、川尻の町が高い文化を持っていたことを示しているのだと思っていますが、なかなか子供が集まらず、今年はとうとう休止になりました。

神社にお参りいただく方々は増えていますが、奉仕する地区の人々が、少子化などで減ってきて、行事が継承できなくなっていくのではないかと、心配しております。

ちょっと短くって申し訳ありませんが、私たちのところの現状と、これからの取組みについて思ったところを話させていただきました。失礼しました。

4、パネルディスカッション

「祭りを残していくのに重要なものとは」

福西▼　「祭りを残していくのに重要なものとは」をテーマにこれからパネルディスカッションを行なっていきたいと思います。まずは、三人のお話を受けて、藤崎八旛宮の岩下さんはいかがお考えでしょうか。

岩下▼　藤崎八旛宮権宮司の岩下です。宮川さんもそうですが、神社界の、神職の立場として、神社における祭りについて、まず、少しお話をさせていただきたいと思っております。神社はそれぞれ御祭神を奉じてお祭りしております。年間の祭りは大きなものが一月からずっとあり、年間通して考えると相当あります。小さいお祭りまでいれると八〇〇回あります。それは御祭神に対して神社が主催して行なうお祭りは、日々の御饌祭と呼ばれる神様にお食事をささげる祭りで、朝夕に行ないますので、三六五日×二回になります。それにそれぞれのお祭りがあり、大祭、中祭、小祭というように分けられます。

皆さんが来られて行われる御祈願とは別のものです。七五三や車の御祓い、お初宮参りなどは皆様のお願いを私たち神職が祝詞という形で、神様に奏上するものです。

それとは別にお祭りがあり、例大祭というのは各神社の由緒が深い日、神社の創建に関わる日に、年に一、二回行なわれる、その神社の最大の祭りになります。その祭りに対して

多くの物事を奉納される方々がいます。日本が風土の中で培ってきた文化ではないかと思っています。アメリカの政治学者のサミュエル・P・ハンティントンは、二一世紀は文明の衝突の時代だという本を書きました。文明と文化の違いは、文明はグローバリゼーションの中で、国際化の中で、国境を持たないものですが、ただ文化は文明と違いまして、その土地・土地で、その風土や生業によって培われるものです。文化は優劣がないものです。一般的に未開の地と呼ばれるところで、アニミズム的な原始的な祭礼をされていれば、それはそれで良いのです。

日本においては東アジアの風土、温暖湿潤気候の中で、四季があり、春夏秋冬とめぐってくる中で、循環型の再生型の文明モデル、文化があると思います。その中で、日本における神社の役割は、共同体の祈り、コミュニティーの核であると神社を位置づけることができます。

その中で、明治以降、神仏分離令が出ます。いわゆる仏教的な要素と神道的な、民俗的な宗教が分離されます。そこで大きな転換があったと思います。安田先生のご報告の中にあったように藤崎宮の祭礼においても、大正四年に明治政府が神仏分離を持ち出し、官社になりました。官国幣社制度ができ、古くは一ノ宮制度などがありましたが、仏教が入る前の状態に戻ろうという考えで、例えていうならば、ヨーロッパでいうルネッサンスで、キリスト教が入る以前の姿にという中で、ギリシャの哲学や神話の世界に戻ったという精神的な部分があったといいます。

日本においては仏教や道教が入る以前の姿に戻ろうというもので、これは急激に起きたものではなく、江戸時代後期には国学者、例えば本居宣長や平田篤胤などの国学者の運動が、その変動の前にはあって、明治以降そして大正、昭和と、先の大戦前までですが、そういう神祇復興の動きがありました。その中で、地域コミュニティーの核として神社が再評価されていきます。

ただ、戦後になるとＧＨＱの神道指令によって、公的機関に宗教が関わることができなくなり、神社がそれぞれ独立した宗教法人になりました。我々は神社本庁という東京にある宗教法人が統括されるところに入っております。全国の八万ぐらいのお宮が入っております。その頂点にあるのが伊勢神宮です。そこで昨年一〇月には、第六二回の、二〇年に一回の式年遷宮が行なわれました。すべての社殿・社宝が造りかえられる大事業が行なわれました。二〇年に一回ということで、途中途切れることもありましたが、一三〇〇年にわたって永遠と営まれてきたと言われております。

二〇年に一度というのは何故かということになるのですが、いろいろな説があるのですが、技術伝承には二〇年が一番適切だというものや創建時代の偉業を伝えるため、有力な

説として「乾米」というものがあるのですが、日本はもともとお米の文化なので、米の貯蔵耐久年度が二〇年という説があります。こうした、いろいろな要素が加わって、合理的に二〇年ということになったと思います。再生の文化です。例えば、ギリシャのパルテノン神殿は石の文化になり、同じ祭祀施設でも違います。日本の伊勢神宮は一三〇〇年前の祭祀のあり方を、その時の社殿が二〇年ごとに若々しく蘇ってきます。神社界では「常若の精神」といいまして、常に若々しく瑞々しくというものになります。

前置きが長くなりましたが、「お祭りとまちづくり」ということで、今回のシンポジウムを行なっておりますが、地域にいる地域住民の意識や生活様式が時代によって変わってきていることは否めない事実であります。しかし、先程申しましたように、我々神社界の人間においては、「祭り」というのは神々の祭りであり、日頃の生活を神恩に感謝するものであるということを再認識するものであると考えております。

奉仕してくれる人々の意識が変わってきている。安田先生ともお話をしてきたのですが、お祭りをフェスティバル、あるいはカーニバル的なものと同一視されては困るところがあります。参加者意識というのか、参加費を払って、お祭りに出ます。だから自分たちは楽しくやる。それはそれで文化としてはあるのかもしれませんが、神社あるいは神社神道においては、そこのところは祭神に対して感謝を申し上げて、地域の平和、安寧を求める心、大義を忘れてはいけないと考えております。

先程発表された毛利さんは藤崎宮の氏子総代として、敬神の念を持ちながら、町づくりを合わせてなさっている。これはまさに地域の核としての神社のあり方として非常に素晴らしい。大変、我々も感謝しております。

その中で、河尻神宮の宮司さんである宮川さんがお話された中で、神社に奉仕されている方々が、少子化によって減少している問題については、なかなか難しいことだと思っております。毛利さん、新町では、この辺りはどのような状況でしょうか。新町では若い世代を取り込む動き、新町の獅子舞もございますけれど、町鉾の方でもかまいませんので。幸い、新町の獅子舞などでは若い子供たちが会員として手伝っていますけれど、今後、どういう方向で次の世代へのバトンタッチについて、神社として協力できることもあればと考えておりますので、一言お願いします。

毛利▼

若い世代にどのように引き継いで行くのか・・・。まちづくり自体もそうですし、新町の総代と話し合う時も高齢化が進んでおりますので、総代に入っていただく皆さんにも、できるだけお祭りに参加していただくにも、どうしても後継者や若い人へのバトンタッチが必要なのは、私どもよく認識

しているつもりでおります。なかなか難しい面があります。

先程、ここでもお話したように、まちづくりをしていく中で、自分たちが住んでいる町、生活している町、会社に勤務している人たちなどが、この町にはこうした歴史があったのだなということを知ってもらうことが大事だと思っています。そのためには例えば、幼稚園、小学校・中学校に出向いて、そこの保護者に、学校の先生に私たちと一緒に勉強する機会を与えてもらう。今日、出席してもらっている、まちづくりの皆が子供たちと一緒に歩いたり、自分たちの新町を勉強することが、地域に愛着を持ったり、誇りを持ったりすることに繋がっていく。それがひいては祭りの参加に繋がる。お祭りがどうして出来ているのか、やはりずっと教えていかないと、一年単位で終わってしまいます。それを繰り返し保護者・先生たちと一緒に地域の勉強をする。私も毎年、一新幼稚園に保護者・先生たちと一緒に地域の勉強会をしています。小学校でも行なっていますし、ここ数年は、英語で地域の歴史を紹介する子供たちの育成をしています。子どもたちが英語を勉強しながら、地域の歴史を外国人さんに教えることが出来るように手伝いをしております。

福西▼　先程、河尻神宮の宮川さんの報告の中にあったように子供たちの行事が今年はなかったというお話があったと思いますが、川尻の方では、お祭りを残していくのにどのような試みがなされていますか。

宮川▼　そうですね。子供数が私たちの頃に較べると半減しており、仕事の多様化で自営業の方が減って、サラリーマンが増えております。地元には寝る時だけ帰ってくる方が増えているのは明らかです。お宮の方も何もしないでいるわけもいかないので、私どもが取り組んでいるのは、お宮に如何に子供たちを連れてくるかを考えております。近くにある保育園関係に呼びかけて、保育園の園児さんたちを呼んで奉納太鼓やお遊戯とかを奉納していただく機会を増やしております。

昔からの子供神輿や傘鉾・風流舞は、そこの地域で出来る限りでお願いしております。神社の祭礼としての盛り上がりは、藤崎宮の岩下さんのお話にもあったように信仰が主体でありますが、雰囲気を作っていくのも大切かと思っています。

川尻には新しい家が建ってきているのですが、旧来の方々が持っているような意識を持っているかというと難しく、外から新たに来られた方が地元の方になるにはどうしても長い年月が必要で、一〇年二〇年という時間が必要になってきます。そういうところなので、じっくり取り組んでいかなければなあと思います。

福西▼　会場の方からご意見をいただきたいと思います。溝辺さん、突然ですみませんが、県として祭りの保護への取組みに

はどのようなものか、お話いただけないでしょうか？

溝辺▼　県文化課の溝辺と申します。今日はプライベートできました。県の方は、民俗芸能については、一九八二年と平成三・四年の二回、悉皆調査をして五〇〇件ぐらいあることを把握しております。あと、祭りや行事は神社、お寺もありますし、個人の家ごとの行事もありますが、悉皆調査というわけではないのですが、市町村からデータを集めて、重要なもの、大規模なものに関しては調査を行なうという形で、平成五年、いや十年に県下全域を把握しました。その中から県を代表する、他県にないようなものをまずは市町村に指定してもらうように働きかけました。更に詳細な調査をするように促しました。それを維持していくのに保存会の方々や神社さんにも働きかけている。その上で、同意をいただければ、指定をしていくことになります。まずは市町村の指定で、更に数年後には詳細な調査を加えながら、県を代表するものであれば、有識者の集まりである県の審議会に諮って県の指定にしていくという作業を行なっています。

それによって、衣装や道具の補修や新調が必要ならば、県ないし、市町村が補助金などを出しています。そうした形でサポートしております。何処の都道府県も行なっていることであります。

その一方では、毎年文化財保護大会という、文化財の保護そして愛護思想を育てる、先進事例の紹介ということを目的としたものを、毎年テーマを変えてやっております。今年は十一月二七日に八代の鏡文化ホールで民俗文化財について、芸能やお祭りの保存活用をテーマにしてするつもりでおります。

そこでは先進事例の紹介と民俗芸能の披露を、舞台ではありますが披露します。保護と啓発を行ないます。まだまだやり足りないところですが・・・。

その他にも文化課では、高校の文化部の活動も支援しております。各高校で郷土芸能部というものもあり、県内には十五、六ありまして、昔は倍以上あったようですが、郷土芸能の発表会を行なって、その中から優秀なもの、取り組みが活発なところには全国の総合文化祭での発表の機会をあたえるという形で支援しております。まとまりのない話ですが、県としてはこうした試みをしております。

福西▼　今、お話しいただいたような試みを行政は、市・県・国のそれぞれのレベルで行なってきておりますが、これまでのお話があったように生活様式の変化などによって、お祭りが急激に変化してきています。それに対応するにはどうすれば良いのかということが問題になってきます。そのためには、お祭りを皆さんに正しく理解してもらうことが必要だというお話が発表者の皆様からあったと思います。それにはお祭り

を調査し記録化し、多くの人々に知っていただく試みなどが必要になっていきます。

また、安田先生のお話がありましたように藤崎宮の例大祭の場合は、お宮が大きく移動することによって変化が起きました。お宮を支えていた地域との距離ができたことによって、お祭りの存続の危機が生まれました。こうした地域の変化がお祭りに与える影響は、これからも他の地域でもありえることだと思います。安田先生、他にこのような事例などをご存知でしょうか。

安田▼

そうした事例はよく知らないのですが、少なくともお祭りというのは、県や市町村の指定になるかならないかは問題ではありません。地域にとって意味のあるお祭りであるのかどうかが重要になってきます。しかしながら、地域にあるお祭りをきちっとした形で調査されてきていないことが問題です。藤崎宮も河尻神宮も北岡神社もあれだけの由緒を持ちながら熊本市も熊本県も全く調査していないことが問題です。こうしたことはありえない話になります。

私はたまたま大学におりましたので、今大学で何をやっているかといいますと、自分の大学の歴史を学生に教えていることをやっています。特に私立大学は熱心にしております。国立大学でも九州大学や広島大学ではやってきているわけです。

熊本大学に入ってきた学生が、熊本大学の歴史をどれだけ知っているのか、というと、ほとんど知らないです。自分の大学の歴史を知らないまま、卒業している。自分たちの進んだ大学がどういう歴史を歩んできたのかを教えるということが、学生教育の上で意味があると考えられています。残念ながら熊本大学ではそれが行なわれておりません。それと同じだと思います。自分たちの郷土の祭り、郷土にどういった歴史や文化があるのかを知ることが、基本的には地域を愛することに、お祭りやその他を支えていくようになっていくと思っております。

そうした取組みをサポートするのが行政ではないかと考えております。青森県の五所川原の立佞武多の例を上げたいと思います。青森のねぶたも小さくなってきております。藤崎宮の例大祭もそうですが、ねぶたも電線によって小さくなってきました。五所川原の市長が昔に戻そうと、明治の頃のねぶたに戻しました。高さ二〇mを超えます。そのためにねぶたが通るところの電線を全部撤去し、信号機も横型だと邪魔になるので縦型に変えました。今では年間三十万ぐらいの観光客が来るようになりました。それぐらいの決断が必要だと思います。本当に重要だとおもうならば、それぐらいしないと藤崎宮の祭りも河尻神宮の祭りも宮司さんがおっしゃっていましたが、ここは通ってはいけないなどと煩いことを取っ払っていくような行政的な決断力が必要なのだと思います。

それから宮川さんがおっしゃっていた新興住宅街にどんどん家が建って、新住民が入ってきて、旧来の住民と新しく入ってきた人がいるという状況ですが、新しく入ってきた人は熊本市の中心部に昼間はいて、川尻には夜寝るだけの人にどうやって川尻という町をわかってもらうのか、川尻に愛着を持ってもらうのか、という動きは昭和五十年代に関東とかでは非常に盛んになっていました。新住民と旧住民の対立をどうやって調整するのかというのはいろいろやってきました。時間がないので、詳しい話はしませんが、愛知県あたりの取り組みが参考になるのではないかと思っています。

パネルディスカッション

子供たちに町を歩かせて、町の中の文化財を発見させるという取組みです。必ずお母さんが参加する。お母さんが参加すれば旦那がついてくる。だから、ターゲットはお母さんになります。お母さんをどう取り込むか、子供たちが地域を見守ることによって、地域の美化運動にも繋がっていきます。こんなところにこんなものが捨ててある、みっともないとなる。幅広い取組みの中で、お祭りを捉えなおしていく必要があると思っております。

福西▼　今の安田先生のお話をふまえて、現在、新町で取り組まれている毛利さんにお話をいただければと思います。

毛利▼　先程お話し損なったことになるのですが、まち歩きと関係していますが、毎年、正月三日に三社参りをやっています。現在は護国神社、藤崎八旛宮があった旧社地、そして段山八幡宮を校区内の三社としてお参りして、段山八幡宮では集まった子供たちにお菓子を、大人はお神酒を、最後には皆で集まって、ぜんざいと馬汁を食べることをしております。藤崎八旛宮は、今はないので遥拝して八旛宮があったことを伝えています。

また、新町の獅子舞は子供たちの育成のために、幼稚園に二組の子獅子を置いて、休み時間に子供たちが被って遊んでおり、小学校では運動会で獅子舞を披露しております。子供の頃からお宮に奉納している獅子舞にふれてもらうことが大切だと思っております。

安田先生がおっしゃっていた子供たちがまちを歩くことは、効果があると思っております。どのような効果があるのか、よくわかりませんが、それでも幼稚園・保育園の子供たちが小学校・中学校に上がって、何年もこうした活動をして

いるので、幼稚園の子供が小学校に上がったときにここもいった、あそこもいったという形で理解の仕方が変わっていくと思っています。なるべく小さいうちからこうしたことに関わった方が良いと思っています。

福西▼　川尻の方はいかがでしょうか。宮川さん、よろしくお願いします。

宮川▼　小学校の方の取り組みは割と盛んな気がします。小学校三年・四年の子供たちが地域内をまわって調べております。今月も私のところに十名ほど、二回来ております。昔はそうしたことがなかったです。最近、学校の取り組みも地元、郷土の歴史を知ってもらうという形で行なっています。良い傾向だなと思っています。もう一つ、上のものに持っていけたら良いなと思っています。

そして、また中学生も職場体験があり、中学二年生ですが、大変なのですが受け入れています。効果が出てくれば良いなと思っています。

安田▼　今のお話ですが、地域を勉強するのではなく、今は逆に子供たちに調べさせることを学校は行なっています。「これ何ですか」という問いに対して、自分たちで調べることを行なっている。このことで注意しなければならないのは学校の先生が引率すると学校の先生が仕切ってしまう、教えてしまうことになります。そのあたりは問題ですが、子供たちが調べたことを発表する場を設けていることが特徴です。教えるのではなく、積極的に勉強させる、興味を持たせて調べさせるという体制を取ることが重要になってきます。

福西▼　総合的学習の時間というのが、小学校三・四年のカリキュラムの中にあり、その中で郷土教育が行なわれております。安田先生がいわれる調べ学習が行なわれております。また、学校教育の見直しが進む中でカリキュラムが変わり、こうしたことがどのようになっていくのかも考えていく必要があると思います。

まちづくりやお祭りを支える地域についても、こうした教育との関わりも押さえていく必要があると考えています。いずれにしてもお祭りを残していくには、お祭りを正しく理解してもらうことが一番大切だということだと思います。

時間となりましたので、以上で今日のパネルディスカッションを終わりにしたいと思います。

※その後、会場と個別の質疑応答を行なった。

5、総評

藤崎八旛宮権宮司　岩下通弘先生

いろいろと藤崎八旛宮の祭礼についてご意見をいただき有難うございました。当宮のお祭りの名称・呼名については、正式名称は「藤崎八旛宮の例祭」というのが正しい呼び名です。先程お話したように大祭・中祭・小祭になりますので、「例大祭」も通称になります。「ボシタ祭り」「放生会」「随兵行列」というのも一般の方、マスコミが名称を付けているだけで、お宮では言っておりません。

私どもの責務として、正しい認識を広めることが大切だと思っております。いろんな形で当宮の例祭は議論になっておりますが、神幸式の中の奉納行事の飾り馬に特化した話題がほとんどです。藤崎宮の祭礼は一三日から始まりまして一六日頃まで行なわれています。これは一五日に献幣祭、一六日以降の最初の日曜日に神幸式が行なわれているからです。神社の中で最大の行事は献幣祭になります。この祭りによって御祭神の神霊的なエネルギーを更新してきました。先にお話しました「常若のための祭り」になります。藤崎八旛宮の例祭は神幸式の翌日の奉賽祭まで続きます。その祭りを通じて祈るものは藤崎宮の繁栄のためではなく、地域社会の安寧のため、平安のための祈りになります。そういうことを粛々と行なっています。

今日のお話を聞いて歴史というのは大事だなと思いました。外交官から歴史家になったE・H・カーは「歴史とは現在と過去との絶え間ない対話である」と述べております。過去を振り返って歴史を学ぶことは非常に大切なことだと思っています。

みなさま、ご存知かもしれませんが、東日本大震災では甚大な被害が出ました。その中の一つである福島県南相馬市のある地区はすべて流されました。熊本県人吉市の県立球磨工業高等校には伝統工芸科があり、日本で唯一の宮大工の養成科です。宮大工になるための技術伝承がなされ、全国から集まっています。（天草の）志岐八幡宮の宮崎國忠さんと青井阿蘇神社宮司の福川義文さんを通して、南相馬市のその地区に球磨工業高等学校の生徒さんたちが造った御社は寄贈されました。

岩下先生

南相馬の方に、その小さなお社ができたのですが、それによって、これで離れていた人々が戻ってきて、また、神社のお祭りができると喜びました。神社を地域の核としてがんばっていきたいといっておられました。祭礼を通して地域の共同体の結びつきや繁栄のために行なっていくものだと思っています。そのために私たちは粛々として御奉仕をさせてもらっております。奉納していただく皆さんに、神社にお酒を奉納する方、歌や舞を奉納する方、飾り馬を奉納

する方、流鏑馬を奉納する方など、そういう思い、熱意を良い方向に持っていき、次の世代に繋げていくことが私たちの責務だと思っております。

このためにいろいろなご意見をお聞きする機会が大切だと思っており、この度は良い機会をいただきありがとうございます。一般の皆様のご意見を参考にしながら、私どもの責務を負っていきたいと思っております。今日は氏子総代の毛利さんも参加していただき、いつも神社と氏子の間を取り持っていただいている方のお話も聞けて感謝しております。また、熊本がこうした祭礼を大事にする文化であり、そして、こうした文化が広がっていくことを願っております。今日は皆様、ありがとうございました。